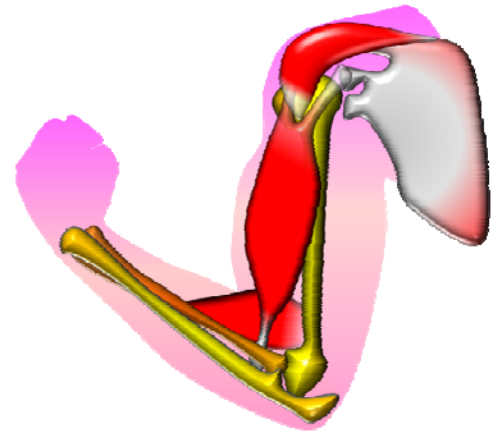


学術セミナー

テーマ：骨格筋萎縮と治療の再考

理学療法学科 三木屋 良輔



日時：平成 25 年 8 月 6 日（火） 17～18 時

場所：西棟 531 教室

要旨：日本は高齢化社会に突入し、加齢や様々な疾患による機能低下と、それらに伴う転倒などにより、結果として要介護高齢者が急増している。

そして、理学療法士は要介護高齢者に関わる地域医療において、訪問リハビリテーションを展開し拡大している。しかし現状は、疾患に関する医療情報の少なさが故に、経験と知識をフル活用して在宅高齢者に立ち向かっていることが多く、満足のいく医療サービスが提供されているとは言い難い。特に高齢者の機能低下として、いわゆる廃用性骨格筋萎縮を意識し、それをターゲットに治療する場面が多く見られるが、高齢者における骨格筋萎縮に関わる因子は、廃用性のみならず非常に複雑多岐に渡ることを知る必要がある。

そこで今回、自戒の意味も含め、理学療法士が理解すべき骨格筋萎縮のメカニズムとそれに対する治療について再考する。



“ミオスタチン関連筋肉肥大”

myostatin-related muscle hypertrophy

生後 2 日目：立位保持可

生後 5 ヶ月：十字懸垂の姿勢可

生後 9 ヶ月：階段昇降可

生後 1 歳 7 ヶ月：高い場所に足をかけ、頭が真下を
向く姿勢から腹筋運動可